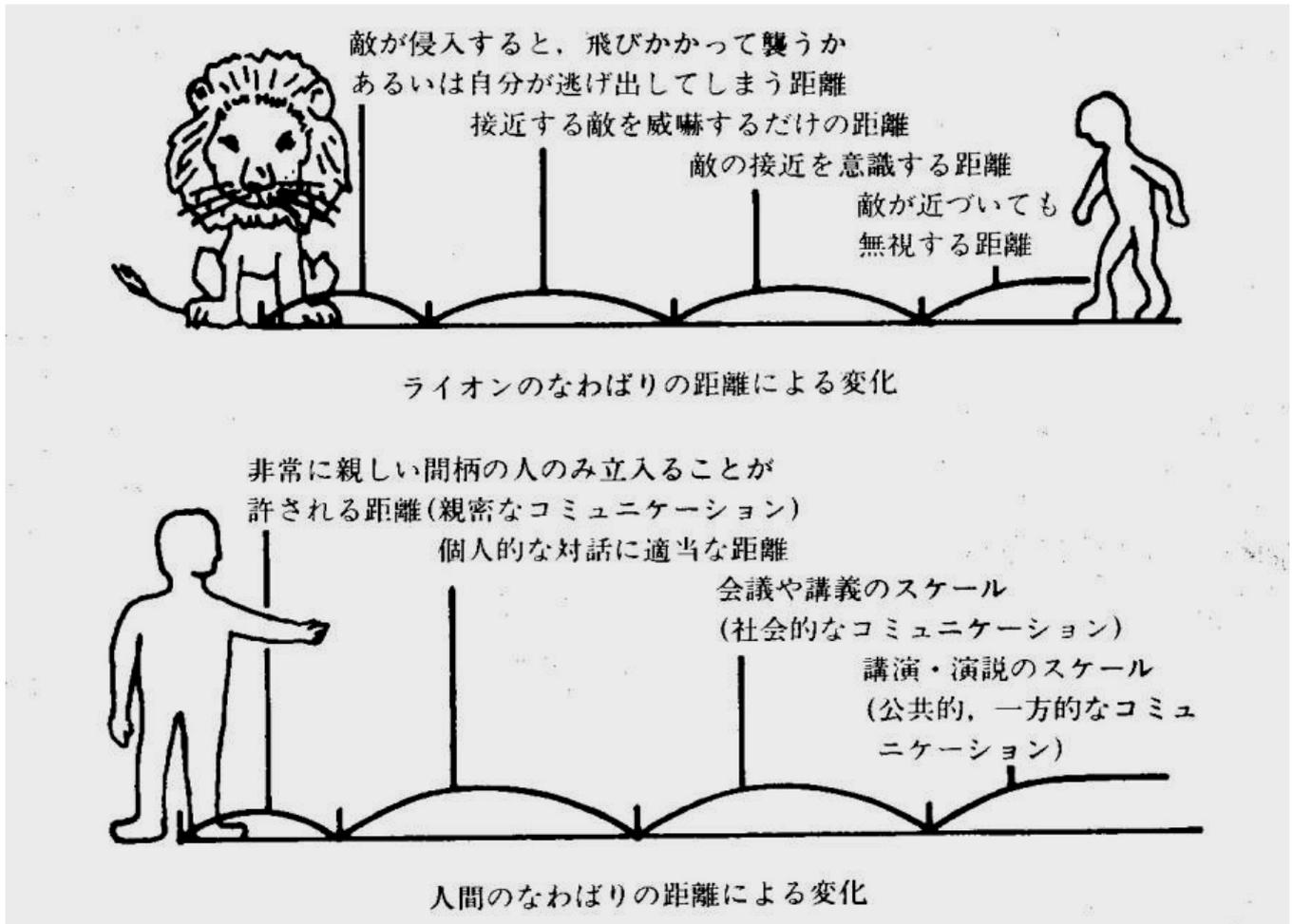


## 「テリトリー形成力を育む間取り」とは



今回は子供の心の発達と子供部屋の関係について、静岡大学教育学部教授の外山知徳さんのお考えを紹介します。外山先生は、子供の不登校や引きこもりと住まいの



関係の研究を通して、独自の住居学理論を確立してこられました。

その理論の中核をなすのが「テリトリー形

成力」という、一般的には聞きなれない概念です。テリトリー、すなわち自分の「なわばり」という自己イメージを持たずに成長した子供に不登校や引きこもりという現象が多く見られることを、多くのフィールドワークから実証し、この能力の発達に配慮した住まいづくりを強く提唱されています。





「家に自分の居場所があることに確信が持てない、つまりテリトリー形成力が未発達のままの子供が増えています。子供だけでなく、家族一人ひとりの居場所がしっかりあること、そしてそれがバラバラではなく、有機的に結びついていること。それが家族が育つ理想の家だと思います。豊かな人間関係が背景にあって、それが現れるのが間取りなのです。」そして、「人は自分のテリトリー（居場所）を確保してから次に他人との関係を自覚し、思いやることができるようになります。このような心の成長を助ける間取りの工夫が必要です。」と語ります。

例えば、12畳のオープンな子供部屋があったとします。子供が成長すると、一般的には右図上のように6畳の部屋2つに仕切ってしまうのですが、外山先生の提案は、下図のようなプランです。「片方の6畳を2つに分けて、3畳を2つ。ここにそれぞれベッドと机を置きます。そうすると、6畳がひとつ空きますね、ここを兄弟の共通の居間（キッズリビング）にします。そうすると、ここで兄弟のかかわりができるのです。ひとりの子どもが使う面積は3畳と6畳を合わせて9畳になります。6畳ふた間の12畳が9畳プラス9畳＝18畳に使えるわけです。キッズリビングは居間の延長で

もありますから、居間とダブルで計算すると、さらに多くのスペースを使うことになります」。

このように、いきなりドアのある個室を与えて家族から分離するのではなく、「ゆるやかでありまいな間仕切り」を

工夫することで、徐々にテリトリー意識やプライバシー感覚の発達をうながすようにします。そして、いつも家族が集まってくるような「気持ちのいい空間＝リビング」づくりの工夫も重要です。単に、吹き抜けがあるとか、広々しているというような「空間」をつくるのではなく、子供の前で両親が生きいきと暮らす姿を示せるような「場」をつくる工夫が必要になるわけです。

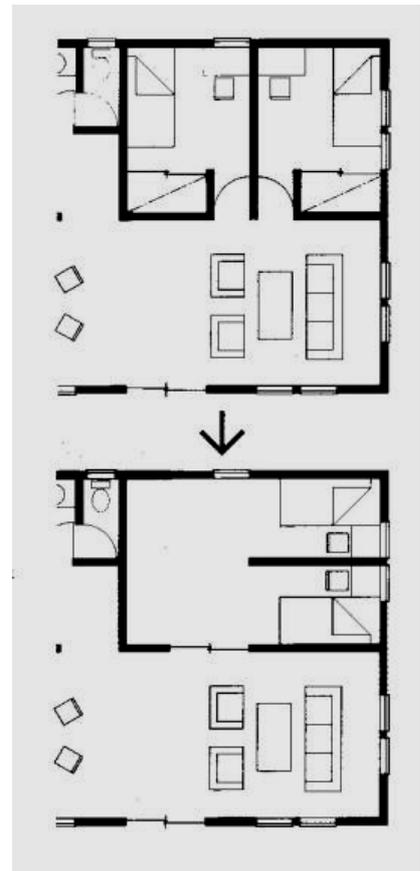


表1 テリトリー形成能力の生涯発達モデル

発達段階	テリトリー形成	拠 点	テリトリー形成手段	発達段階の特徴
0 歳	漠然とした空間の認知 核(拠点)の発生 テリトリー形成・拡張 空間的制約 	安心できるもの(見なれたもの)のある所 寝る・食べる・排せつする場所	1. 習慣づけられた信号や物(母親の鼓動に安心する・お気に入りの玩具に安心するなど) 2. 光・音・動き・触覚への興味に基づく運動(音を出すものや動くものところへ行ってつかもうとするなど)	母親依存・親依存 物依存 拠点の定着と テリトリーの拡張
1 歳	部分的伸長 二次拠点の発生 	二次拠点(平気で遊べるところ)	3. 帰属性の確立を保證するものの存在(親がいれば安心するなど) 4. 帰属性の確立を保證するものを介した解釈(親の情緒不安定が子に移るなど)	
3 歳	広域化・社会化  園での演習	二次拠点の拡散・他方では一次拠点としての自分の家 家の中では玩具をしまつて置くところなど	5. コミュニケーションの成立	他者依存(友達関係) 物の管理 侵犯に対する抵抗力(玩具の取り合いや喧嘩) 移動に対する抵抗力(引越し) 自立(一人で行ける・帰れる)
学齡期	家庭・地域から離れた学校社会での応用 家庭内での個のテリトリー形成 	拠点の分離 自分のコーナー・プライバシーのない自分の部屋		コーナーの管理
思春期	家庭内での個の核形成(自立の演習) 	わが家の中のプライバシーを守る自分のコーナー・部屋(拠点の隔離) 拠点の拠点としてのわが家		プライバシーの確立(他家との比較による自家の認識) 空間依存(空間の管理・時間の管理)
成人	テリトリーの独立 	家庭から独立した拠点	(上記の手段は大人になってからのテリトリー形成にもあてはまる)	自立的なテリトリー形成能力(物・空間・時間・人間関係の管理能力)
結 婚	テリトリーの共有・核の共有 	スウィートホーム		協同的なテリトリー形成能力
家庭建設	家族成員共通のテリトリー形成 	マイホーム		集団のテリトリー形成
社会人	テリトリーの重層・拡散 			テリトリーの自己管理能力(の限界) 社会的活躍
老人	テリトリーの縮小 			テリトリーの消滅(死)に対する不安と恐怖 疑似的なテリトリーへの逃避

# 道具よもやま話 (5)

道具よもやま話

6

三木の千代鶴貞秀さん



わが国の大工は、職人氣質（かたぎ）といわれるように、昔から仕事の質に関わる道具と材料については並々ならぬこだわりをもってきました。また道具をつくる側の鍛冶も大工の心意気に応じようと、心根を込めて多くの優れた道具を生み出してきました。ここでは職人のやりとりの中から生まれた様々なエピソードを、紹介します。



三木の千代鶴貞秀さんの所には数回お訪ねした。貞秀さんは今年75才、鉋作り一筋に60余年になる、昨57年には黄綬褒賞を受けられた。叙勲の日には東京まで這ってでも行きたいと喜んでおられたが、突然病に倒れ、暮れに入院されてしまった。

貞秀さんは、一見気難しそうに見えるが、仕事を離れると好々爺である。鍛冶屋さんは朝が早い。午後の3時頃には打ち上がる。

「仕事を終えて、うまい物を肴に一杯やるのが何よりの楽しみ。飲んだら寝るだけ。他には何の趣味もないよ」と、まことに屈託ない。「だけど、こう歯が抜けちゃっては食う楽しみもお仕舞いだ」と笑っている。到来物だけれど、まだ一杯残っているからと、わざわざ取り出してくれたのが、幻の酒“越の寒梅”だった。

東京の銀座に“更科”というそば屋さんはまだあるのかと聞かれた。「東京に初めて行った頃、是秀師匠にご馳走になったあの“そば”の味が忘れられなくて、二度目には一人で行ってみたいけれど、“もり”か“かけ”か、どう注文したらよいのかわからなくて、周りの人が注文するのを見ていて、やっと頼めたよ」と笑う。

それからは私も酒の肴などを持って行ったら、飛び切りおいしい“じゃこ”の干物をお返しにいただいた。正月まで残しておいて作った“ちんから”の味は格別だった。



この読み物は、竹中大工道具館元副館長・嘉来園夫ならびに元館長補佐・西村治一郎の2名が主となり、「道具・よもやま話」と題して竹中工務店社報（1983年発行）に連載したものを、改めてここに転載したものです。

30年近く前の記述のため、古くなった内容もごさいますがご容赦下さい。